

毎年2月11日に子ども達の絵を展示し保護者と共に今の育ち・これからの育ちを語り合う会をしています。その中で自分たち自身の保育・教育の再認識のために実践発表も行います。

今回の発表の内容を原稿にしました。

参加できなかった保護者の皆様そして子どもの育ちについて関心のある方などぜひ目を通して感想やご意見を頂けたら嬉しいです。

大中里こども園では生きる力を育てていくために、保育・教育の理念・目標として「大地保育」を掲げています。

「大地保育」とは、自然と関わり、自然の中で遊び生活しながら、自分で体験をして学び、力をつけていく保育・教育で、何をしたいか自分で考えて行動できる子どもを育てることでもあります。

「大地保育」では子どもたちが自ら体験することを大切にしていますが、そこで子どもが十分に体験できるように考え、環境を整えたり、導いたり、見守っていくというのが大人の大きな役割であると考え

「ごきげんな子どもに育つ」

「豊かな環境で育てる」

「創造性豊かな子どもに育てる」を日々実践しています。

ごきげんで、創造性豊かな子どもになるようにと願い、豊かな環境の中でのびのび過ごして欲しいという子どもの幸せは、日々一緒に過ごしている大人が大切な部分を担っているということから今回は保育士の側からどう取り組んでいるのか考えての発表です。

まず基本になる「ごきげんな子に育つ」ために「子どもの安定・安心」について大人がどんなふうに心がけているのかという点に触れます。 ※色字は事例です

なかなか園になれなかった0歳児の事例です。

慣らし保育が1ヶ月以上あったのですが、ゆっくり慣らし保育ができた分、慣れるのも早いかな・・・と思っていたのに反して、なかなか私に慣れてくれず、毎日、本当によく泣いて心が折れそうになりました。

顔を見れば無くし、おんぶでいた方が少し落ち着いているかなと思い、1日寝ても冷めてもおんぶして過ごしました。

しかし、私の担当の子は1人だけではありません。他の2人だっておんぶをして欲しい時があります。

だから、おんぶから降りて遊べる時間を増やしていった方がいいのだろうか・・・となんども思い、悩み、クラスでMTGを重ねていきました。

「おんぶをすることで、安心して居る時間も増えてきてるから、泣くのが短くなってきたし、泣く声も小さくなってきたと思うよ。」

「もう少しおんぶして満足できれば、降りて遊べるようになるよ。」と、アドバイスをもらい、

「今が大事な時。他の2人を見れない時は、協力するから、大丈夫だよ！」と、心強い言葉をもらい、担当の2人には、もう少しだけごめんね・・・という気持ちと、ありがとう・・・という気持ちで関われるときには、しっかりと関わるように心がけました。

そして、おんぶをしながらも、

「お外行こうね！」

「お日様気持ちいいね！」

「あったかいね！」など、声をかけるようにしました。

ある日、わらべ歌を他の子とやっていると、泣き止むようになってきたことに気がつきました。

まずは、私の声を覚えてもらおう！

おんぶしていても声は聞こえる！

そう思って、わらべ歌を歌うことを意識しました。

そして、わらべ歌をきっかけにおんぶから少しずつ下りる時間を作るようにしていきました。

初めは1分と持たず、遊び出すかと思えば、すぐに泣き出してしまいました。でも、

1分でもおんぶから降りれたことは、慣れてきた証拠だ！

それが、素直に嬉しく、1分が1分半、1分半が2分と少しずつ降りて遊べる時間が増えていきました。

遊びの面ではこのように少しずつ、慣れていったのですが、次に悩んだのが食事です。

ラックに座らせると泣き、抱っこでも泣き、ほとんど食べてくれず、すごく悩みました。

母乳で生活していたため、ミルクも嫌がり飲まなかったのです。どうか、ご飯を口にしてもらいたくて、組んでいる先生に協力してもらい、おんぶしながら食べさせたり、外だと機嫌が良かったりしたので、外で食べさせたこともありました。

園に、私に慣れて欲しい、そんな気持ちでいっぱいでした。遊べる時間が増えていくと、徐々に私との信頼関係もでき、今ではすっかり慣れて、たくさんの笑顔を見せてくれるようになりました。

十分おんぶで対応してあげられたことで、安心でき、無理なくその子のペースで対応することで信頼関係ができ、情緒の安定に繋がっていったのだらうと思います。

焦って遊びに誘っていたり、いろんな大人が対応していたら、きっと安心するまでもっと時間がかかったららうと思います。

この事例に限らず、大中里こども園では、

0, 1, 2才の乳児期には育児担当制という体制を取り、一人一人の発達や成長の度合いをしっかりと押さえ、一人一人にあった関わりを心がけています。そのために、ミーティングを通して、いろんな視点で子供を見ること、クラスだけでなく、**全体で協力することを大事**にしています。

入園したての0歳児の配慮として心がけたのは、いつもあなたと一緒にいるよと肌を密着させるおんぶをして、周りではこんな事をしているよ、こんなものが見えるよ、と場の共有を声に出して伝えていった事です。それが、いつも私のそばにいてくれる、私のことを見てくれているという安心につながり、徐々に信頼関係ができていったということだと思います。

遊ぶこともそうですが、乳児にとって食べることも苦勞するところです。

がそこを、おんぶしたまま食べさせたり、外で食べさせたり...

いろいろ試したり悩んだり、こうすれば上手くいく、という答えが保育にはないところが私たちの仕事の難しく、手間のかかる所です。

子どものためを思って、私たちができることはやってみる。

そういった日々の積み重ねが情緒の安定につながっていくのだと思います。

大中里こども園では育児担当制をしているのですが、いつも1対1でじっくり相手をできるわけではなく、そういう時には、同じ思いでいてくれる大人同士が補い合い 協力してくれることで、可能になっているということとはとても大きな部分です。

次に 情緒が安定していると、やってみたいことをやってみるようになります。

遊びを見つけられなかった1歳児。

常に担当の保育者と手を繋いでいたい、一緒にいたい、近くにいたい。

担当の大人が少しでも離れると泣き、遊びという遊びができずにいました。

どうしたらいいか、クラスでミーティングしたり、全体でも話し合う機会をなんども持ちました。

発達はどうか？

「最近、言葉がわかるようになってきたね。

歩行が不安定で転びやすいところがあるよね。

担当の大人が近くにいる時は、安心して遊んでいるよね。」等様子をあげ、みんなで意見を出し合いました。

そして 「無理に離れないで、離れるときにはちゃんと声をかけていくようにしたらどうだろう。」と、アドバイスをもらい、心がけていくことにしました。

2ヶ月くらいたった頃、変化が見られるようになってきました。

「どどこ行ってくるよ。終わったらくるからね。」と声をかければ、少しの時間離れても遊びが続くようになってきました。

そんなある日、ブランコに興味を持ち、毎日ブランコのところに行くようになりました。

初めは揺らし方がわからず、体を上に向けてみたり、ただつかまるだけだったのが、繰り返し同じ遊びをすることで、こぎ方や体の使い方がわかっていきました。

足を使って勢いをつけ、自分で揺らせるようになると、楽しさも倍になり、外に出れば朝から夕方までブランコに向かっていくようになりました。

3、4日経った頃からご飯の時間になっても「イヤ!」と行って部屋に入ってこようとしなくなりました。集中して一つの遊びをすることがなかったので、どれだけ集中してあそべるかみたい気持ちもあり、ご飯になっても部屋に入るうとしないでブランコをしていることを見守ることにしました。

自分でやりたい遊びが見つかった喜びをお母さんにも伝えると、お母さんも協力してくれ、朝、少しでも余裕をもって登園し、ブランコに乗る姿と一緒に喜んでくれたり、見守ってくれました。

やってもらうことを待っていることが多く、外に出るにも時間がかかっていたのですが、このブランコをきっかけに自分からトイレに行ったり、帽子を被ったり、靴を履いたり、自分でやろうとするようになり、次の行動や遊びにとっても意欲的になっていきました。

待つときには待つ。

その子を信じて見守る。

時間を十分に取るために、保育者同士で協力する

お家の人の励ましや協力などが遊びの楽しさを感じさせたのだらうと思います。

大人の都合でご飯だから・・・とやりたい気持ちを止めるのではなく、その子の行動の中に小さな変化を感じながら、対応したことでやらせてもらえた!という満足があったのだらうと思います。それは、

自分を認めてくれる、大事にしてもらっているという自己肯定感に繋がっていくのではないかと思います。

これをきっかけにいろんなことに挑戦したり、やってみたいという好奇心が育っていくといいなと思っています。

1歳児にもなると、それまで大人に守ってもらっていたところから外に目が向き、冒険しだすのですが、中にはまだ不安な子もいるので、**慎重にみんなで考えて、みんなの関心事としてミーティングをしながら育ちを支えたい、というのが私たちの1つのやり方**となっています。

ベテランの保育士からの「そばを離れるときに、ちゃんとどこに行ってくるのか、何をしてくるのかを伝えたら」のアドバイスはとても有効だったのですね。

ママたちもそういう経験はありませんか？

「ママはご飯を作ってくるね。」 「～するね。」と、大人の居場所や行動を伝えるといいのではと思います。ぜひやってみてください。

楽しい遊びが見つかる、気持ちが前向きになり、靴を履いたり、トイレに自分で行くなど他のことも「やれるよ」につながっていきます。

今では一人の子の成長と共に保育士の動きも変わり、大人も一緒になって楽しめています。次に、自分でやれるんだという思いができる、好きな遊びを充実させ友だちとの関わりも増えていく2歳児の例。

ダンボール板を道路や氷、海に見立てて、その上を歩いたり、車やバスに見立てて遊ぶ等、いろんな見立て遊びを楽しむ2歳児。

後半になってきて、友達と遊ぶことが楽しくなり、ダンボール板での遊びも友達と一緒に家を作ったり、お風呂に見立てて繋げて楽しむなど、遊びが広がってきました。

そんな2歳児のクラスに、たまたま入ることがあったある日。

牛乳パックで作った長椅子を使って、1人の子が坂道を作って渡り始めました。長椅子と長椅子の組み方がかなり不安定でしたが、その子はその不安定さを楽しんでいるように見えたので、危険がないよう近くで見守ることにしました。

楽しそうに遊んでいる姿を見て、

「私もやってみたい!」と少しずつ友達が増えていき、その不安定な橋を渡るのを楽しみ始めました。

1人でも不安定だったところに3、4人きたので転ばないかハラハラドキドキ。

転んでもすぐ手が出せるように、腰を浮かして気をつけてみていました。日頃入っていない分、その子たちの様子が細かくわからないため、どこで声をかけたり、手助けしたら良いのかがつかめず、とにかく怪我だけは気をつけようと思い、どんなことをするのか見守ることに徹しました。

立って渡る子、

滑り台のようにお尻で滑る子、

頭から滑る子、

いろんな遊び方をしていく中で、友達の遊び方を見て自分で考えて、長椅子をくみなおしてみる。

不安定なのが怖い子は自分で考えて安定させる。

やってみて楽しさを感じる姿に自己決定の元となるものを感じました。自分で試してやってみる。その力が次の遊びに繋がっていくことを感じ、とてもわくわくしました。

そんな子どもたちが面白くて慌ててカメラを取りに行き、写真を撮りました。

(入り口のパネルのところにその様子が載っています。)

カメラを構えたことで、「私できるよ」と得意になって渡る子もいました。

橋が壊れると自分達でまた橋を組み直す姿

橋の組み方をいろいろ試したり、考えたりしている姿を見て

自分たちで遊びを考え、広げていけるんだな～とおもうと同時に、2歳児なるといろんなことを試したり考えられる年齢になっていきている分、大人はあまり口を出さずに待つこと、見守ることも大切なんだと感じました。

又大人が「楽しいね」「面白いね」と共感する事で子供の遊びはもっともっと広がっていくんだなと思いました。

まだまだ大人がいないと危ない年齢。

でも、子どものやってみようとする気持ちに十分寄り添い、待ったり、見守ったりすることで思いがけない楽しさや喜びを私たちも味わえる。

もちろん、大丈夫かな？やめさせようかな？どうしようかな。と迷うこともたくさんあります。

見ていてあげられないときには、「今はごめんね。」と止めることもあり、大人も葛藤します。でも子どもの事を十分に理解し、信じる力、保育者の観察力、見守る力が子供の持つ力を引き出していく…

信じてみてくれている大人が側にいることで1人から2人、2人から3人と友達と遊ぶ楽しさを感じ、1人で遊ぶことより、友達のすることにヒントを得たり、一緒に試したり、危なっかしいところも経験しながら、少しずつできることが増えていくのだと…

2歳児の危うさ、できそうでできない、できなそうでできる。そんなちょっとした冒険に付き合い、彼らの挑戦したい気持ちに寄り添えた気がして、私自身が2歳児との距離の持ち方、支え方を学んだひと時でした。

クラスの担任が2人とも休みの日があり、いつもと違う大人が2歳児クラスに入ったことで見えたことでもあります。集団の中ではこういった、いつもと違う人がかかわることが多々あります。そんな中で慎重になる部分と、2歳児を楽しむ部分が自分の保育を振り返ることにもなった事例です。いつもとちょっと違うことは子どもにも大人にも刺激になるということ。いろんなハプニングを楽しめる心の余裕と、やっぱり保育技術を身に付けることの大切さを感じます。こうして安心や安定の日々を過ごして幼児になると、行動も広がりを見せます。そんな幼児の様子のお話です。

3歳児になると、自我が育ち、なんでも自分でやりたがるけれど、まだまだできない自立と甘えの葛藤があります。今まで通り甘えていたい気持ちもあるし、自分で何でもやってみたい気持ちが出てきます。4、5歳になると、自分をコントロールすることを身につけ、仲間と遊ぶ楽しさが出てきて、コミュニケーションをとりながら、優しさや、いたわりもみられるようになってきます。また、挑戦欲が強くなり、好奇心が旺盛になってきます。そんな子どもたちと、いろんな経験を楽しんでいます。少し、事例で話してみます。

お正月行事を伝えようと、3歳児のクラスで、大人が獅子舞いを作って園庭で踊り、子どもたちの頭をパクパクして遊んでみました。他のクラスも一緒になってとても盛り上がりました。それを、じっと見ている子がいました。その子はクラスに戻って、何やら始めていました。クラスには、いつでも制作が出来るように、廃材（箱、カップ、不織布、布、各種紙等）を用意してあります少し離れたところで見ていると、どうやって作ったら獅子舞いが出来るのか箱や紙を取っては重ねてみたりと、いろいろ試していました。

一人がやり始めた制作が2人、3人と広がり、家庭でも作ってきた子もいました。

細かい唐草模様を丁寧にはさみで切って貼っていたり、獅子舞いの歯や、髪の毛など調べ、ああでもない、こうでもない、と、楽し気に話しながら作るなど、どんどん素敵な獅子舞いが出来上がっていきました。そして、真似をして踊りが始まり、一人で踊っていた子が、次の日には、二人組んで踊り、ほかのお友達が、おもちゃを叩いてお囃子をするなど、どんどん遊びが広がっていきました。転んで泣いている子や、元気がない子の頭を、子ども同士でパクパクする優しさも見られました。この遊びは1月中続き、早番の時は1歳児が5歳児の獅子舞いを借りて、お友達にパクパクする姿が見られました。

大人がやった獅子舞いを見て、それをきっかけに、作ろうと思う子がいて、作れる環境があつて、クラスや、家庭にも浸透して遊びも広がったこと。それがとても嬉しくもあり、子どもはいろいろな物を感じ取り、学び、刺激を受けて育ちあうその為に大人の私たちも、思いを持って子どもたちと向き合わなくてはと、あらためて思いました。

3歳のクラスでの遊びから、思いがけない収穫があつた話ですが、**大人のすることが子どもを刺激する。大人も楽しんだから子どももやってみたいにつながった。**

子どもがやる気を出したときに、大人はそのやりたいをどう援助していくか。先回りしていくのではないですが、いつでも子どものやりたいに答えていける準備はしておきたい。

今回 1つ 提供できる廃材がクラスに準備されていたこと。

2つ 思いが冷めないうちに獅子舞つくりができたこと。

が、子どものやる気や満足を感じるようになった教育をしているとても大事な部分だと思えます。

もう一つ、大人の側からの働きかけがあつての保育の展開が見られた例です。

次に、大人の“楽しい”が子どもの“楽しい”になった事例を紹介します。

秋になると、イチヨウの葉っぱで毎年プールを作ります。イチヨウがひらひらおちて来る、その時のタイミングでプールを作るので、週案には入れられません。

今日がいい日、と、大人が感じて、イチヨウ落としから始まって、それに大人が歓声をあげて楽しむ姿があつて、その楽しい声が聞こえてくると、どんどん集まってくる子どもたち。みんなで遊ぶとさらに楽しく、盛り上がります。葉っぱを上に向けて、ひらひら落ちて来る様子、そこからこぼれる光、動きなど、いろいろなものを子供たちは感じています。

たくさん遊んだあとは、みんなで片付けです。イチヨウのプールの片づけは大仕事です。でも、子どもも大人も一緒になって、運んだり、掃除したり... みんなでやると、それも面白い遊びの一つになってしまいます。「楽しかったね。」という言葉が出ていました。

最後に使っていたブルーシートを、子どもたちに干してくるように頼みました。

ところが、すべり台に持って行ったのです。大人では危険を考えて、干すことはしないだろうと思う、すべり台に干したことがきっかけで、それを見て子どもたちは、すぐに「かいぞくせん！」と言ってその中を滑って遊び始めました。影がティラノザウルスに見えると「ティラノザウルス号」になり、ブルーシートをかけてあつた所を口と見立て、トンネルのようにして口の中から滑って遊びだしました。何回か滑っているうちにブルーシートがめくれて取れてしまいました。修理しなきゃ。と子どもたち。これからどうするんだろう...と、しばらく見守ることにしました。かけ方を工夫し、それでもうまくいかなくて考えていたので、「何か必要なものはある？」と問いかけると、「ひもが欲しい！」との声。そこでタフロープを出すと、つける位置をいろいろ考えてつけたり、5歳児同士で、「僕、上持つから下持つてて。」「そこだと取れちゃうからもっと上につけた方がいい。」などと話し合ったり、リーダー性を発揮して、3、4歳に「そこ持つてて。動かしちゃだめだよ。」と、声をかける場面も見られました。大人がやってしまえば早いけど、子どもと一緒にやるから

こそ、自然な言葉が出てきます。2度手間3度手間にもなるけど、一緒にやるから、いろんな面が見られ、気づく事がたくさんあります。子どもの側にいる私たちも、常に子ども心を忘れない大人でありたいと思います。イチョウのプールは準備にも片付けにも大人の占める部分は大きいのですが、子どもにとってイチョウのプールは「楽しかったねー」です。

手間暇かけるのは大人の仕事ですが、ここで子どもにも手伝ってもらい、さあ片付けようとしたときに、思いがけず遊びが展開していくという大きなハプニング。

そこにあったのは子どもの面白そうだと楽しんでやっている姿。その姿に共感できる大人でいたいと思います。

次に、年長だけがする活動から何が生まれ、何が育っているのか。

大中里こども園では、子どもたちの健康と幸せを願って、こいのぼり祭りをします。

毎年各年齢ごとに、こいのぼりを作ります。5歳児になると、針と糸を使って布でうろこを縫いつけ、たいようグループのこいのぼりを作ります。異年齢クラスなので、4歳の時、5歳のお兄さん、お姉さんがやるのを、「いいなー」「やりたいなー」、「面白そう・・・」と、思いながら見たり、さわったりしてきた子どもたち。

でも、針に糸を通すこと等、実際にやってみると、思っていたよりもずっと難しく、根気のいることです。が、がんばってやってみる。そんないろいろな経験を通して、やっと出来上がったこいのぼりが空で泳ぎだすと、「やったあ！」という達成感、満足感を感じます。

小さい子たちは、「すごいなー」「泳いでるよ」（触ってみたい）と憧れの気持ちが湧いてきます。「たいようさんになったら出来るよ。」というお兄ちゃんたちの得意げな言葉が小さい子達の心にしっかり残っていくようです。

お兄ちゃんたちが丸太を切っているのを小さい子たちは興味を持って見えています。「すごいねー」という言葉。側にいる大人も一緒に「すごいねー」と、共感し、一緒にがんばれー、と応援します。

大人と一緒に、そっと丸太に触ってみた時、子どもから、「かたいねー」「いいにおいがする」「粉が出てるよ」等、いろいろな言葉が聞かれ、いつも見られないような表情をします。子ども達はしっかり五感で感じています。そして、大きくなったらできるかなという、興味、期待感が自然にわいてきているようです。切っている5歳児も、小さい子たちが応援に来てくれると、少し手が痛くても、頑張っている姿が見られます。

運動会では、運動会後に楽しい場面がたくさん見られます。小さい子たちが5歳児の真似をして、「はじめのことば」を、台の上に乗って言ってみたり、おみこしを担がせてもらったり。当日はできなくても、そのあとしばらくは他のクラスがやってた事を真似ては楽しんでます。やってみたい気持ちを、やらせてもらえることで次の意欲へとつながっているようです。

このように、0歳から6歳という年齢は、心と体を作る時代だということを私たちがしっかり意識して、自分の体を使って体験、経験することを大事にしたいといつも思っています。

そのためにも、大中里では異年齢で関わる外遊びをたくさんしています。たくさんの人と交わって欲しい。コミュニケーションを取りながら育ってほしい、また、外で感じる風、におい、音などのいろいろな物を五感で感じて欲しい、という願いを持って日々子どもたちと生活しています。そして子どもの側にいる私たちは、子どもの興味、好奇心、やる気を育てる環境を整え、共に楽しみ、喜べる集団であることに努力していきたいです。そして「やりたい」という意欲を持つこと。「できない」から「できる」「やりたい」から「やった」という充実した毎日。それが、生きる力を育てることにつながるのだと思います。

こいのぼりの縫い物も、丸太の取り組みも5歳児がするのですが、同じ大中里こども園にいる他の年齢の子どももその活動がすぐにみられる、という園の広さも幸いしているのはとても良いものです。

いつでもどこかで誰かが何かをしている。音が聞こえる。声が聞こえる。やっていることを目にできる。それは大きな刺激になり、憧れになり、意欲になります。

5歳児の活動ではあるけれど、それを身近に見て、時には一緒にその活動を体験していくことが、子どもの育ちに大きな影響があるというのは、大中里こども園の大人はみんなが感じています。

だから大人も積極的に他の人のする事、他のクラスの遊びを見たり、仲間に入れてもらったりします。

こいのぼり、丸太の活動だけでなく、幼児でなわとびを始めるとそれを見ていて、お兄ちゃんたちが居なくなると縄を引っ張り出し、跳べなくても跳んでるように縄を持ってぴよんぴよんしています。それを一緒に楽しむ大人がいます。

砂場の穴掘りを見ていると、水を運ぶのを手伝わされていることもあります。お兄ちゃんに言われ、こぼれないように運ぶ姿のいじらしいこと。

でもそういった体験が、次に自分がするときの予行演習のようになって、こうしようああしようという思いになっているようです。大きくなって砂場遊びをはじめると、何の躊躇もなくやっているように思います。

もう1つ大事なことは、幼児になると、大人はあまり近くにずっとついていなくても、離れて別のことをしながら見守ることも必要だということです。

大人が近くにいると、どうしても大人の顔色をうかがうし、自分の意志でなく大人にゆだねることもあるので、距離の取り方が大切です。大人の声をかけるタイミングや、どこまで待ってみていられるか。子どもが自分で考えていけるようにサポートしていく役割が大人にはあると思います。

大人主体ではなく、子ども主体でいることを大前提に、大人はいたいです。

丸太でも運動会でもそうですが、大きくなったらする活動が身近で見られるってことは、大きくなる楽しみを持つことにもつながっているし、毎年同じことをやっていくってこともとても大切にしています。

それが子ども自身で自分のできることがわかる事にもつながっていると思います。

外で過ごすことで知らず知らずの刺激があり、子どもの感覚がそれだけ使われます。

体を思い切り動かすこともできます。

子どもの発達は手先からではなく、大きく体を使うことからだと私たちはこれからも外での活動をたくさんしていきたいと思っています。

子どもが主体で、大人はあくまでサポートです。

子どもが少しでもできることが増えた。楽しい顔が見られた。笑い声が聞こえる。

満足できたか。やり切った感はあるか。子どもはこの生活で充実しているか...

大中里こども園での生活が、すぐにとは言わないけれど、いつか必ずどこかで役に立つ経験になっている、それが生きる力になっていると信じて、明日からも楽しい毎日を心がけます。

今回の実践発表は

子どもが主体的に 子どもを中心にした 保育・教育をするために大人の関わり方と配慮を考えてみました。

こうして私たちの思いを発表することで自分の保育を振り返り子ども達への思いはもちろんですが私たちの園を選んでくださっている保護者の皆様にも私たちの保育・教育への理解と協力を頂けたらそれと同時に私たち職員が自分たちの日々を再確認してさらに充実した生活ができるよう努力するためです。

これからも「大地保育」がめざす「ごきげんなこども」「生きる力」となる土台のために精進します。